



付 15 話 米国での留学へ出発 No.3

留学のことなどすっかり忘れ、アメリカ生活を楽しんだ。食事はいつもファーストフード、たまにレストランに行く。アメリカの食事はけた外れに量が多く、味も私好みではない。慣れのせいかわファーストフードのフライドチキンやピザが美味しい。それでも、レストランに行くに困るのはチップである。何時、いくら渡すべきか、経験がなく、全く分からない。最初は、チップ制度を知らず、食後、料金を払って出ようとすると、何となくウェイターの視線が突き刺さる。A 君と食事をしたとき、初めて理解した。彼は料金に 1 割から 2 割上乘せして支払う。料理の旨さや接客などで決めるそうで、対応が悪い場合はチップを払わない。これは、どこか満足でないというメッセージだそうだ。

彼の友人のウェイターにあったことがある。1 ドル札の束を抱えていた。チップで得た金であり、1 日の収入の大部分であるという。店からの給料は非常に少なく、チップで生活費を稼ぐ。チップの分配は店により異なるそうで、全チップを従業員で等分配する店、チップは受け取った従業員が貰う店などがある。無論、接客しない人は評価によって給料で支払われる。ここまで、アメリカでは能力主義で、競争社会なのかと、非常驚くと同時に、日本も弱肉強食の時代がやってくるぞと思った。

A 君の友人は多彩でアメリカ人やアジア人、無論、日本人もいる。日本人の友人から夕食のお誘いがあった。ワインを 1 本持って、サンダーバードに同乗し、出かける。そこは日本人のみのパーティーで、時々、コミュニティの仲間が集まり、食事をし、情報を交換する。彼らの多くは永住権を持つが、帰化したわけでない。何時不都合があるか分からない。情報を共有し、助けあうことで、安全に暮らすことができる。戸建ての建築で、山際の森の中にあり、アイランド型のキッチンとリビングが広く美しい。外にはプールがあり、その向こうには山の森が夜間照明で浮き上がって見える。多分、中流家庭と思うが、そこにはあこがれのアメリカがある。

週末の夜はディスコに行く。当時、ディスコが大流行。体育館を大きくしたような会場で、音楽をガンガン鳴らし、ステージの上ではダンサーが、下では群衆が躍る。アメリカでは自由を思う存分に楽しむ。ポルノさえも、自由に出版だ。だが、子供と酒については非常に厳しく、酒場の入口では年齢を必ずチェックする。毎回、ID を出せといわれ、うんざりだ。確か、当時 12 時だと思うが、この時間になるとどんなに盛

り上がっていても、照明が付き終了。後は、帰宅するか、酒の出ないレストランにゾロゾロ移動する。帰宅途中、車中から大通りの脇を見ると、街路樹沿いに規則正しく人が立っている。女性が客を待っており、次々と車はその脇に停車する。何やら話があり、女が車に乗り込み去っていく。これもアメリカなのであろう。このアンバランスが妙に面白い。

A 君の休日に、世界で初めて作られたディズニーランドに出かけた。ここはダウンタウンから車で約1時間のアナハイムにある。無論、ここについては良く知っている。子供の頃、テレビで、プロレス中継と交互にディズニー映画が放映されていた。アニメと共に、ディズニーの歴史やランドをつくる過程が映し出されていた。これをみれば、子供はだれも一度は行きたいと思う。当時のアメリカは本当に遠い。経済的にも、一般人がそう簡単に行けるところではない。

東京ディズニーランドができる前である。初めてゲートをくぐったときは、子供の頃が蘇り、ワクワクドキドキ。それなのに、何に乗ったかはあまり覚えていない。楽しいことは余り記憶に残らないのかもしれない。それでもパレードを見たことは、はっきりと覚えている。

セントルイスに出発する日がやってきた。ロサンゼルスは本当に楽しかった。日本の生活が白黒なら、ここでの生活はカラー映像、全てが輝いて見える。飛行機の出発時刻に合わせて、サンダーバードに同乗し、出かける。出発時刻に遅刻しそうと彼に告げると「大丈夫、国内線だから」、その意味が分からず、焦ったがどうしようもない。空港に着くと既に出発のサインが出ている。空港の職員が速く走れとせかす。「もう出発だろう」と思ったが仕方がないので走りに走った。タッチの差で扉をすり抜け、やっと席に座る。機内に持ち込んだ大きな旅行用キャリーバックはスチュアートが持っていく。他の乗客は何事もなかったように新聞を読み、話をしている。「そうか、これがアメリカの国内線か」と変に納得した。

セントルイス空港に着くと、またもや不安が襲う。電話で到着時間をGould教授に伝えたが、英語力が不安。ターミナルに出て、Gould教授を探したが、それらしき人がいない。またもやトラブルか。困った。どうしよう。その時、学生らしき若者から声をかけられた。話をすると、Gould教授に頼まれた学生で迎えに来たらしい。多分、彼にとって普通の会話だが、早すぎるのとなまりがあり、理解できない。ゆっくり喋ってもらい、漸く分かったことは、これからホテルに行き、明日大学に連れて行くという。彼の車に乗り、セントルイスの街並みを眺めながら、ここから留学生活が始まるのかと思うと感慨深く、胸が熱くなる。